講演「障害のある人の人権」

毎日新聞論説委員　野　沢　和　弘

こんにちは。ただいま御紹介いただきました野沢です。よろしくお願いいたします。普段は新聞社で論説委員という，主に社説を書く仕事をしております。全体で22人ぐらいおりますので，週に1回ぐらい回ってくるかなという感じで，割と気楽に構えているんですけれども，実は今日は執筆に当たってしまいまして，ここ来る前に慌てて会議で説明して原稿を出してきたところです。これが終わったらまた飛んで帰ってそれを直さなければなりません。

今日は障害者の人権についてお話しさせていただくわけですが，障害者虐待防止法が施行されて以降，各地でものすごい数の報告が上がってきております。また障害者差別解消法が昨年の通常国会で成立し，国連の障害者権利条約の批准についても，ついこの間，書類が国連に提出されました。こういうところまで日本の社会は来たわけです。一体どんなところから，今日に至る日本の障害者の権利擁護が進められてきたのでしょうか。

戦後の日本の社会福祉は，児童福祉法や身体障害者福祉法などといった法律からスタートしています。児童福祉法というのは，戦災孤児のために作られたものと言われておりますし，身体障害者福祉法に至っては傷痍（しょうい）軍人の方を念頭に置いて作られたと言われており，この頃は，障害者や子どもやお年寄りというのは，家族の中で面倒を見るものだというのが常識だったと思います。

社会保障というのは非常に新しい分野の政策，学問で，世界各国を見てみますと，スウェーデン，デンマークのような北欧諸国は，政府・自治体がかなり高い水準で福祉サービスを整えてきましたし，アメリカのように市場がかなり幅を利かせている国もあります。基本的には，日本のような家族中心というのが各国の原形で，スウェーデンやデンマークでも，やはり家族で面倒見たいという人は多く，最近は特にユーロ危機以降，民間や家族が障害者やお年寄りの世話を担うという傾向が強くなってきています。

実は私は，日本のように家族中心でやっていくのはそんなに悪くないと思ってきました。と申しますのは，私の長男も重い知的障害と自閉症というユニークな障害がありまして，時々，町中でも混乱してパニックになってしまい，私や家内の手が傷だらけになったりすることがあります。でもこれは決して彼が乱暴者なわけではありません。むしろ彼は非常に弱い，繊細なタイプで，何かのきっかけで見通しがつかなくなって，不安になって，それで身近で一番信頼できる人に向かってくるということなんです。しかし，そのような行動は世間

からは誤解されやすいかもしれません。こういう，とても生きづらい人たちを支えていくには，やはり家族のような，当人のことをよく知っている人たちが一番でしょう。そういう考え方も私は悪くないと思ってきました。

でもやっぱり家族だけで支えるとなると，女性，特にお母さんが家庭に縛られてしまいますし，障害のある本人にとっても家族だけでいいのかという問題があります。そして高齢化だとか，家族自体の変容だとか，いろんな要素があって，家族による福祉というのはなかなか難しくなってきているんです。

人口ピラミッドといわれるグラフで，日本の人口の年齢ごとの変遷を見ていきますと，15 歳までの子どもの数，そして現役世代と言われる層は，現在ものすごい勢いで減っており, 75 歳以上の層だけがどんどんどんどん増えています。これが日本の今の状況です。なぜかというと，平均寿命がどんどん延びているからということが一つあります。2055 年の日本の平均寿命は 90 歳を超えると言われています。

一方, この 20 年間でどのぐらい高齢者が増えるかを各都道府県別に見ますと，もう地方の方はあんまり増えません。現役世代が減っているというのは非常に問題ですけれども，地方の高齢化は，ある程度峠が見えてきました。今問題なのは，むしろ都市部の高齢化問題です。特に首都圏は，すさまじい高齢化が進んでいて，家族や隣近所の支え合いという機能が希薄な都市部で，これから多くの高齢者を一体誰がどうやって支えていくのかというのが，大きな課題といわれているところです。

世界のどの国も高齢化が進んでいますが, 中でも日本は 2000 年を超えた辺りからトップに躍り出て，今は独走状態です。ヨーロッパも高齢化はしていますが, 手は打ってきているのでカーブがなだらかなんです。スウェーデンなどは，かつては高齢化は日本より高かったんですけれども，どんどん手を打ってきて，非常になだらかな波になっています。注目すべきなのは韓国です。急激な高齢化が進んでおり, あと 15 年ぐらいすると日本に迫ってきます。アジアの諸国は，日本同様にこれから少子高齢化が非常に進んでいくと言われています。

ただ，今日も実は社説で書いたのですが，これまでマスコミが高齢化を余りにも批判し過ぎてきたんじゃないかという反省も私はしております。やっぱり大変だ大変だって言うと世の中暗くなってしまいますし，よくよく考えてみると今の日本の高齢化というのはそんなに悲観する材料ばかりではなく，むしろチャンスもあるんじゃないかなと思うようになりました。

昔の高齢者と今の高齢者がどのぐらい違うのかという所に着目すると，意外にチャンスが見えてくると思うんです。例えばサザエさんの家の波平さんですが，この方は年齢がお幾つかと言うと 54 歳です。意外に若いんです。昔のサラリーマンの定年は 55 歳でしたから，波平さんは定年を間近に控えた，隠居間近

のおじいちゃんサラリーマンという設定なんです。今，なかなか 54 歳でこういう人はいません。また郷ひろみさんは今 58 歳でこの前３回目の結婚をして双子が生まれたと報道されておりましたし，三浦友和さんとか中島みゆきさんなんていうのは還暦を越えています。先日はついに矢沢永吉さんが高齢者の仲間入りをしましたし，ジャパネットたかたの社長さんなどは，波平さんより 12 歳，一回り上なんです。加山雄三さんなどは「後期高齢者」をもうとっくに超えているのです。80 代はさらにまたパワフルで，三浦雄一郎さんのようにエベレストまで登っちゃう人がいるぐらいです。こういう方々が日本の高齢化社会の主役というふうに考えると，なんか悲観するのも，ちょっとばかばかしくなってくるような気がします。つまり健康年齢が非常に伸びているんです。

復興期は若くて力のある人たちが大量に必要だったわけです。ところが，ある程度社会的なインフラが整ってきて，まだまだ足りない所はありますが，生活の楽しみだとか, 安心感だとか, そういう所に人々の価値観が移ってくると，こういう，いろんな経験が豊富で，才能があって，まだまだ元気でやる気のあるような人たちが大量にいるということは，意外にチャンスかもしれないなというふうに思います。

幕末の頃に伊能忠敬という人がいましたが，彼は千葉県で造り酒屋のお婿さんでした。若い頃はお婿さんですから家を守るために必死になって働くわけです。そのころは遊びとか趣味とかなかなかやれない。子どもに家督を譲って隠居してから，もう１度趣味の天文学を始めて，日本中を歩き回って近代的な地図を作りました。彼が日本地図の測量を完成させたのは，71 歳の時であったと言われております。当時，西洋列強が日本に押し寄せてきて開国を迫っていました。幕府としては，一体どこからどこまでが日本なのか，日本というのは一体どんな形をしているのか，ということを知る必要があったんです。ところがそれが分からなかった。これをこういう子どもに家督を譲ったおじいちゃんが，隠居をした方が成し遂げてくれたということなんです。この伊能忠敬のように，功成り名を遂げてお金や地位や名誉を得るよりも，むしろ自分の好きな事をして社会にも貢献したい，こういう方々が，今いっぱい出てきているということは，日本にとって大きなチャンスなのではないかと私は思います。

福祉のことを考えるとき，むしろ心配なのはこういうことです。

家族で面倒を見てくださいと言ったって，大家族なら見れます。サザエさんの家は 7 人家族ですので，もし波平さんに認知症が始まったとしても何とかなると思うんです。しかし日本の社会というのは，家族がどんどん小さくなっています。核家族になって，さらに小さくなって，今一家族の平均人数は 2.46 人しかいないんです。東京都内だけ限ってみると 1.99 人です。こんな小さな家族になってしまったのでは，もう家族の中で福祉を支えていくなんてその前提が

崩れてしまうわけです。

◇　◇　◇　◇

政府は 90 年代の終わり頃に，社会福祉基礎構造改革というのを始めました。これは社会福祉制度の在り方を，家族をベースにした措置制度から，契約制度に変えていくということです。介護保険などによって，これからは障害者の支援をするサービスをする事業所を産業化していくので，対等な関係でサービスが必要な人と契約を結んでくださいということです。当時この制度設計をしていた厚生労働省のある方が，こんなことを言っていたのを覚えています。従来の措置制度というのは憲法 25 条の福祉だが，これからの契約制度というのは憲法 13 条の福祉だと。つまり，健康で文化的な最低限度の生活を保障しましょうという福祉から，幸福追求権と個人の尊重を規定した 13 条が保障する内容を目指す福祉へ，ということだと言うんです。措置時代は自分で福祉サービスを選べませんでした。これは行政によって当てがわれる福祉だったんです。でも契約制度になってからは，自分で好きなサービスを選んで幸福を追求してくださいと。そして障害者やお年寄りも，家族や施設の中で守られているだけの存在ではなく，一人の人格として，同等の権利を持った人格として見ていこうと，こういう思いが込められていたと思うんです。

ただ大きな問題がここで出てきました。選ぶと言ったって，果たして全てが自分で選べる人なんだろうかということです。認知症のお年寄り，あるいは知的な障害のある方々，寝たきりの重度の心身障害の方々，彼らは一体どうやって選ぶのでしょうか。家族や成年後見人や相談支援の事業所の方々が代行したり補足したりしているわけですが，果たしてそれは彼らが本当に望むような福祉サービスなんだろうか。本当に彼らが望むような生き方ができているのだろうか。こういうことが議論されるようになりました。この頃から，自己選択とか自己決定ということが盛んに議論されるようになったんです。そのような意識が，これまで埋もれていたいろんな問題を世の中に出してくるきっかけになったんだろうと思います。

介護保険ができる 1990 年代の末期の頃，様々な問題がどんどん表に出るようになってきました。児童虐待なんて昔からあったわけです。私も新聞記者になって 30 年以上たちますが，駆け出しの記者の時には，地方の警察を担当しました。この頃にもやっぱりありました。慌てて警察に取材に駆け込むと，当時こういうふうに言われたのを覚えています。「これは事件じゃないからマスコミには発表しません」「社会問題じゃないんです」と。「法は家庭に入らずって知らないのか」などとも言われました。そんなもんかなということで，なかなかこ

ういうのは記事になりませんでした。しかしだんだんそうした事件が増えてきて，今のような大きな新聞記事やニュースになるきっかけになったのは，1998年の10月頃だと思います。

当時，私は毎日新聞社会部で児童虐待取材班というのを担当していて，各支局網を通じて，全国でどのぐらい子どもが虐待によって犠牲になっているのかというのを調べてみたんです。報道機関が調べる範囲なのでたかが知れていますけれども，それでも98年10月までの1年半の間に56人の子どもが亡くなっておりました。その頃は学校で子どもがいじめられて自殺したということになるともう大報道になったんです。たった1人自殺しただけでも大きく報道されるのに，児童虐待で1年半に56人も子どもが亡くなっているということにちょっと驚いたんです。それまで埋もれていたといいますか，記事にならずにボツになった話だとか，あるいは地方版の小さなベタ記事にしかならなかったような児童虐待の事件を，もう一度再取材して，世の中に問おうじゃないかということでキャンペーン報道を始めました。

私が最初に取材に向かったのは，3歳の男の子が三日三晩，実の母親を含む3人の大人からし烈な暴力を受けて亡くなったという非常に痛ましい事件でした。男の子はお母さんに向かって「もうお母さんこの家出て行こうよ」って一言言い残して息絶えていったんです。

警察が報道に発表する時は三日三晩のうちのごく一部，象徴的な所だけを発表します。それが新聞記事になる時にはまたその中から一部が記事になるので全体像が分からないんです。裁判所に取材に行って，公判で検察官が三日三晩に起きた事を冒頭陳述で読み上げるのを，私は記者席でメモをずっと取っていました。メモを取りながら胃がよじれて口の中から飛び出してきそうな感覚を覚えました。そのぐらいすさまじい出来事だったんです。ふと見ると，3人いる裁判官席の一番左の女性の判事の方がもう泣いて泣いて，なかなか裁判を続けられないような，そんな状況だったんです。このぐらいすさまじい事だったのかと衝撃を受けました。我々がこれまで社会問題として見てこなかったところに，実は深刻な事が起きているのではないかと思ったのがこの頃です。

同じ頃，介護保険ができる前に，全国で有料老人ホームが雨後の筍のようにでき始めたんです。中には悪質な所もあって，2,000万とか3,000万とか高額な入居金を取って，終身介護，つまり亡くなるまで手厚い介護をするという契約で，お客さんは入ったのに，御本人が認知症になって判断能力が落ちてくると，介護の手抜きを始めるというような所もありました。コストを削減するために，個室に入れるということだったのに雑居部屋に移してしまうというようなことをやったんです。これは，当時公正取引委員会が，そんなことするのであれば終身介護というのは虚偽表示だという切り口で問題化していきました。我々も

それを記事にしましたが，当該のホームが匿名で発表されるためどこのホームがそういう悪質なところか分かりませんでした。名前を出さないと選ぶ側が選べないじゃないかということで，有料老人ホーム協会等に「名前を出したらどうか」と掛け合いましたが，「一部のアウトローのホームがやっていることなので名前なんかは出さないでほしい」「業界のイメージダウンになる」「中に入っている人も心配する」と言われ我々も最初は匿名で記事にしていきました。しかし何度も何度も同様のことが繰り返されるもんですから，やっぱり実名報道しなきゃいけないんじゃないかっていうことで，いろんな関係者に協力を仰いで実名を割り出し，我々の責任において実名報道しました。そうしたらその悪質なホームの一つは，当時の有料老人ホーム協会の理事長が経営しているホームだったんです。契約社会の中で判断能力が衰えていく人たちを守っていくっていうのは大変なことなんだなっていうことを，身に染みて感じた覚えがあります。

◇　◇　◇　◇

次は障害者の虐待事件です。水戸のアカス事件という事件を，1996 年 12 月 23 日付けの毎日新聞の社会面で最初に報道しました。

茨城県水戸市にある段ボールの加工工場で知的な障害のある人たちが 30 人雇用されておりました。当時は今ほど知的障害者の雇用が進んでおりませんでしたから，地方都市で 30 人もまとめて就職が難しい障害者を雇用しているということで，地元では福祉熱心な優良企業として有名だったんです。ところが一皮めくってみたら，一人の社長による暴力です。殴る蹴るが日常茶飯事です。

19 歳の男の子は，コーヒーの空き缶を両膝に挟んで正座をさせられていました。膝の上には漬物石が 2 個載せられていたのです。スリッパで何十回も顔をビンタされ，耳が半分ちぎれて大出血し病院に運ばれるということもありました。公的な団体から 4,800 万円の補助金をもらって従業員寮を建てそこに社長も住み込んでいましたが，その寮が性的な虐待の舞台になっていました。女性が半分ぐらいいましたけれども，社長が片っ端から虐待をしていたのです。7，8 人，その当時の女性から話を聞きましたが，すさまじい事でした。面白がって自分の飲み友だちや遊び友だちを夜中に連れ込んで，自分が見てる目の前で，まだ 15 歳の女の子に対してまで虐待させるといったこともしていました。

こういう虐待事件というのは密室性が高いのでなかなか発覚しにくいと言われますが，いろんな現場を歩くと完全な密室というのは意外になくて，実はいろんな方々が知っているということが分かります。この事件でも，多くの方が虐待を目撃したり，噂が出回っていたりしていました。自分の目の前で娘がパ

イプいすで背中を殴られているのを目撃した親もいました。

ある女性はとんでもない性被害を受けて，ふらふらになって寮を逃げ出しました。今日は国家公務員等研修会なのでなかなか言いにくいんですが，どこに駆け込んだのかというと，地元の警察署です。次に労働基準監督署・ハローワーク，次に福祉事務所に行きました。でもどこに行っても相手にされませんでした。当時は警察や労基署は，障害者の問題に余り詳しくなかったこともあり，割とそういう対応が多かったんです。同じ頃に起こった知的障害者の虐待事件であるサン・グループ事件でも，労基署に SOS の手紙が何度も来ていたのに動かなかったということで国賠訴訟が起こされ，2 億 7,000 万円の賠償金の支払いを命じる判決が出たりしております。

福祉事務所のケースワーカーの方だけはどうにも私は解せなくて，話を聞いたんです。そうしたら「大変申し訳なかった」と反省していたのですが，「びっくりしたんだ。あの福祉熱心な優良企業でこんなことが起きているなんて信じられなかった」ということでした。また，障害者特有のコミュニケーションの特性があって，なかなか当事者の話を理解できないということもあったようです。「質問してもトンチンカンな答えしか返ってこない。本当なのかな。仕事が厳しくて嫌で愚痴でもこぼしに来たんじゃないのかな，そんなふうに思えてしまったんです」とも言っておりました。私はそれを聞きながら，この人は必死になってうそだと思いたかったんだな，と思ったんです。相手は地元の有力な企業です。自分の同僚や先輩たちが，障害者の就労のために長年力を尽くして育ててきた企業なんです。一人の現場の検査官の方に何とかしろと言ったって，どうしていいか分からない。そういう時って，どうも人間の心理って後ろ向きになってしまうんじゃないかと思います。ですから現場の職員さんだけに責任を負わせるというのは，やっぱり私は酷だと思います。やっぱり制度を作って，きちんとそういう埋もれている声を表に出していって，それを救済に結び付けられるようにしていくことが必要なんじゃないかなっていうふうに思ったんです。特に障害者の方ってなかなか言ってくれませんので。

この事件はどうなったのかと言うと，社長が補助金の不正受給をしていたのが発覚して，逮捕されて懲役 3 年，執行猶予 4 年という有罪判決が下りました。ただし性的な被害については，20 件近く弁護団が追控訴をしたんですけども，ただの 1 件も起訴には至りませんでした。やっぱりなかなか障害のある方々の証言能力，あるいは記憶力というものが，懐疑的に，あるいは慎重に見られてしまったということで，これはどこの国に行ってもやっぱりそういう傾向はあるんです。判断のハンディのある人というのは被害に遭うとなかなか救ってもらえない一方，容疑者になるといろんなものを背負い込まされるリスクがあると言われております。

ただ日本の場合には，村木厚子さんの冤罪（えんざい）事件をきっかけに検察当局がかなり本腰を入れて見直しをしておりまして，いろんな所で改善が図られてきていると思います。

◇　◇　◇　◇

白河育成園の話をちょっとしたいと思います。これは福島県の山奥にあった入所施設です。30 人定員の入所施設。ところが中に入っている 27 人は，東京都内の障害者です。2 人が横浜です，地元は 1 人だけです。都内は土地が無かったり，地価が高かったりするので施設を作れないということで過疎地の施設に措置をしていたんです。80 年代の半ば頃に建てられたそうですが，その頃都内で入所施設への待機者が 1,900 人ぐらいいたそうです。これに目を付けた，後に理事長兼施設長になる男性が，その親たちを説得して回りました。「1,900 人も待機者がいて，お宅の子どもに順番なんていつ回ってくるんだ。それよりも私に寄付してくれれば，いい施設を作って入れてやるよ」と。1 人 800 万円ずつ集めたそうです。

彼は施設の運営や福祉については素人同然だったそうで，10 代，20 代の元気いっぱいの障害者をどうやって処遇していいか分からない。職員さんを雇うんですけれども，職員さんも嫌になってどんどん辞めていっちゃう。人手は足りない，コストは削減しなきゃいけないというので，入所施設にもかかわらず泊まり夜勤を職員に一切させなくなった。理事長が一人で毎晩泊まるからいいということにしちゃったんですね。それで持て余してしまって午後 6 時から翌日の朝 6 時までは就寝時間という決まりを作った。10 代，20 代の元気いっぱいの人たちに 6 時に寝なさいといっても普通は寝ないですよね。ところがこの施設は不思議なことに午後 6 時になると若者たちが一斉に熟睡を始めたそうです。なぜかと言うと睡眠薬を大量に使ったのです。もうとにかく薬で徹底的に動きを封じ込めちゃう。これは典型的な身体的虐待の一類型ですが，こういうことをやっていました。

10 年たって，4 人の女性職員の勇気ある告発によってこれが発覚し，東京都は新たな措置をしないということを決めました。そして中に入っていた人たちが一旦家に帰りましたので，この施設は閉鎖されました。ところが一人だけ女性が最後に取り残されました。なぜかというと彼女のお母さんが頑として退所してくることを認めなかったんです。他の親たちがそのお母さんを一生懸命説得する場面があって，私もたまたま立ち会いました。「もうこんなひどい施設だって分かったじゃないの」「お宅の娘さんだって帰りたいって泣いてるんだから，帰してあげましょうよ」一生懸命他の親たちは言いました。ところがそのお母

さん，顔色一つ変わらなかったですね。「いや，皆さん，どうぞ勝手にさせてください」「私はこの子の実の母親なんですから，うちの娘の幸せは誰よりもこの私が一番よく知っているんです。うちの娘は死ぬまでずっとこの施設の中にいるのが一番幸せなんです」と言っていました。なぜそのお母さんはこんな意固地になっちゃうのかと思ったんですが，後で教えていただいたところによると，このお母さんは 800 万円ではなくて 2,400 万円寄付していたそうなんです。もう自分の人生をかけちゃっていますから，なかなか引き返しがつかないんです。

実は虐待の現場を回ると，こういう親たちによく出会います。虐待されている我が子を守るんじゃなくて，虐待してる相手の側に立って用心棒になっちゃうような親たちですね。なんでそんな理不尽な事が起きるんだろうかって思うんですけれども，さきほどの水戸の事件でもそうでした。あるお父さんに言われました。「こんなかわいそうな子たちを雇ってもらえるだけでありがたい」「少々ぶたれたっていい」「あの社長は神様みたいな人」などと言うんですね。どうしてこんな理不尽なんだろうって思いますけど，「じゃあ，あんたはどうなんだ」って言われた時に，私だって自分の心の奥を見つめてみれば，そういう傾向があることを否定できません。障害の重い子を持っている親たちにとって，自分の子を預けている相手に対する独特の屈折感だとか，遠慮だとか，あるいは負い目だとか，そういうものがやっぱりあることを否定できないんです。今でこそ，これだけ福祉サービスが整ってきましたけれども，昔はそんなものはありませんでした。一体この子はどうやってこの先生きていったらいいんだろうか，どの親もやはりそういう不安を抱える時期があるんです。

私の場合なんかも，当時は――家の子どもはもう 27 歳ですのでもう 20 年以上前ですけれども――自閉症なんていうのは，まだあんまりよくきちんと知られていなくて，いろんな所に専門家を訪ねていくわけですけれども，いろんなことを言われました。「自閉症っていうのはプールに連れて行けば治るから連れて行け」なんて言われて，もう週末になると必死になってプールに連れて行った時期がありますけれども，もちろんそんなことでは治りません。先天的な脳の中枢神経に何らかの異常があって起きる障害ですので。親戚から「週刊誌に自閉症を治せるっていう人が載っていた。連れて行ってみたらどうか」と言われて試しに連れて行ったこともあります。そうしたら超能力を持っているというおじさんが出てきまして，「私の超能力で治してみせるから毎週新幹線に乗って来なさい」と言われました。料金は非常に高いんです。「そんなお金も無いし時間も無いんです」って言ったら向こうはがっかりした顔をして「だったらこのカセットテープに超能力を詰めてあげたから，これを毎晩聞かせなさい。寝る前に毎晩聞かせれば必ず治る」なんて言われまして，高いんです，このカセットテープも。でも私，買いました，それ。毎晩聞かせれば治ると聞いて少し

でも良くなれば，と思って買ったんです。子どもの枕元にラジカセを置いて，再生ボタンを押すわけです。さあどんな超能力が流れてくるんだろうと思ってドキドキして待っていたら，そのおじさんの声が聞こえてきました。「あー」ってうなり声が 30 分ぐらいするんです。家内と暗がりの中で顔を見合わせて「これが超能力か」みたいな感じです。毎晩毎晩聞くわけです。「１日でも忘れたら効力が落ちる」なんて言われますから，こっちは必死です。ところがなかなか治らない。治らないけども，人間の順応力って不思議なもので，「あー」が始まると，家族でぐっすり眠れるようになりました。だまされたと思うのもしゃくですし惨めな感じですよね。だからよく家内とは「治るかどうかは分からないけれども，さすがに気持ちは落ち着くね」なんて話していたんです。ちょっと笑い話みたいですけども，親たちって結構こういう目に遭っているんです。

障害のある子どもの当時の親なんていうのはもう格好のカモです。何でも言う事を聞く，いくらでもお金を出す，どこでも行くという３本セットです。ただ我々も学習してくるので，だまされそうな相手とは付き合わなくなるし，嫌な思いをしそうな場面というのは何となく察知してきて出ていかなくなるんです。何だか予防線を張ったような，うつむき加減の歩き方，人生の歩き方が染み付いてくるんです。学齢期ぐらいまではあっという間に過ぎていきます。さあいよいよ学齢期を過ぎる頃になると，また不安になってくるんです。そういう時に出会う支援者というのは過剰に期待をかけちゃうんです。水戸の事件の社長や，白河育成園の施設長はこういうタイプの人でした。「いや，お母さん，あんたはよくこんな障害の子を背負ってここまで生きてきたね」「あんたえらいね」「でもこれから心配だろう」「俺に任せてくれ」「一生面倒見てやるから」そんなことを言われたら親はもうイチコロです。「じゃあぜひよろしくお願いします」なんて子どもを預ける。少々体罰が行われているなんて聞こえてきても，なかなか信じられなくなっちゃうんです。

親っていうのは切ないもので，この子のためにと思っていろんな事をやります。子どもはかわいいですからね。特に障害のある子は不憫ですから，この子のために，この子のためにと思っていろんな事をやります。大抵は子どものためになりますけれども，よくよく注意して考え直してみると，この子のためにと思ってやっていることのうちの何割かは，この子のためではなくて，親が自分自身の安心感にすがり付いて，あるいは不安で不安でしょうがない気持ちを，何とか捨てたくてやっていることであるように思います。それでもそれは大抵子どもの幸せと重なり合いますけれども，時々それが背中合わせになってしまうことがあるということなんです。

とはいえ今は虐待防止法ができて，障害のある子を一人の人格として見ていこうじゃないかという時代です。いくら親がそう言ったからといって，被害を

受けているのは，一体誰なのかという所を見失ってはいけないと思います。このお母さんには同情してもらって大いに結構ですし，私だって同情します。でも金銭的にはともかく，決してお母さんが被害に遭っているわけではありません。ここを見落としてはいけないと思います。

◇　◇　◇　◇

アカス事件，白川育成園事件，サン・グループ事件等以降，国や自治体は，様々な権利擁護の制度を盛んに作るようになってきました。これは 90 年代の末期から，介護保険ができて以降，措置から契約への変化によって生まれてきた流れです。

「障害者 110 番」というのは，サン・グループ事件があった滋賀県がいち早く作った制度です。県の単独事業でしたが，これが全国に波及していきました。でも初代の 110 番室長は私に「確かに無いよりあった方がいいと思う。ただ，ここに電話を 1 台置いて『さあ，障害者の皆さん困ったことがあったらここに電話していらっしゃい』って，ここに電話をかけてきてくれる障害者が一体どのぐらいいると思う？」と言いました。「ここに電話をかけてきてくれる人っていうのは，この制度がなくたって，多分声を上げてくれるだろうから，我々は分かる。本当にひどい目に遭っている人に限って，なかなか声を上げてくれないんだ。彼らが生活している現場に我々が入っていって，地べたに這いつくばってじっと耳を澄ませていないと本当の声は聞こえてこない」「彼らと一緒に仕事をしたり，一緒に生活をしたりしている人たちが，本当の事を我々に言ってくれなければ SOS は届かない」。彼はそう言います。本当にそのとおりだと私も思います。ひどい目に遭っている人に限って，なかなか言ってくれないのです。

先日も千葉県社会福祉事業団でひどい虐待があって 19 歳の方が亡くなっていますけれども，あの事件も何人もの方が，職員から暴力を受けていました。その被害を受けていた人は，全員言葉のしゃべれない人でした。暴行をしたのは非常に弱い職員たちだと思います。言葉がしゃべれる人には手を出していない。言葉がしゃべれない人だけに手を出しているということなんです。

なぜ，彼らは SOS を発しないのか。判断能力に非常に重いハンディがある人たちの場合，まず言葉がない，そして自分の身に起きていることの意味が分からないということがあります。水戸の事件が明らかになった端緒はこれでした。19 歳の女の子が，週末に寮から家に帰ってきている時，お母さんが見ている目の前で見知らぬ男性の体を触りに行ったんです。お母さんは娘のその様子を見てびっくりしちゃってその場で気を失ったそうです。一体うちの娘は会社で何

をさせられているんだ，何を社長から強いられているんだ，ってびくびくしながら調べていったら，ひどい性被害が出てきたんですね。ところがこの娘さんは，自分が社長からされていることの意味が分かりません。自分が被害を受けている，いけないことをされているということが認知できない。認知はできないけれども苦痛だとか屈辱感だとかはそれなりに彼女は味わえます。自分の生活や人生をボロボロに踏みつけられてしまう，非常に残酷な行為だと思います。

じゃあ，コミュニケーションができる障害者はちゃんと被害を言えるのか。そんなことはありません。いじめの事件の被害者を見れば分かるように，障害が無くたってコンプレックスの塊になっている人，無力感にがんじがらめになっている人というのは，なかなか本当の事を言ってくれませんね。どうせ言っても無駄，もっとひどい目に遭うかもしれない，親に知られたくない，恥ずかしい思いをしたくない……いろんな無力感から立ち上がれないでいるという場合があります。

◇　◇　◇　◇

なので，潜在化している被害を発掘していくような，そういう仕組みが必要なんだろうというふうに思うんです。そのためにできたのが虐待防止法だと私は思います。ものを言えないのは障害者だけではありません。児童虐待防止法は2000年,高齢者虐待防止法は2005年,障害者虐待防止法はずっと遅れて2011年にできましたけれども，これらはいずれも，全ての国民に通報義務を課しているところがポイントだと思います。特に障害者虐待防止法は専門職，福祉や医療や教育の専門職には，早期発見義務を課している，つまり彼らと一緒に仕事をしたり，一緒に生活をしたりしている専門職には，ただ分かった時に通報をするだけでなくて，早期に埋もれているものを発掘し，発見してくださいという義務が課せられています。そうでもしなければ，ものを言えない人をこの契約社会の中でなかなか守っていけない，こういうことだろうと思うんです。

障害者虐待防止法は2011年にできましたけれども,2010年以降だけ見ても，様々な障害関連の重要な法律ができてきました。2010年というのは，民主党政権ができた翌年ですので，なかなか予算の関連法案も通らなかった，衆参ねじれの時期ですけれども，障害者関係の法律はこんなに通ってきているんです。

よく政治部系の論説委員から不思議がられ，なぜ，障害者関連の法律はこんなにうまいこと行くんだと言われますけれども，実は自民，公明，民主，各党の中に障害者問題に非常に熱心な先生方が何人もいらっしゃって，その彼らが水面下で障害者の問題だけはちゃんと進めていこうじゃないかというような話合いのテーブルを作っていることが非常に大きいだろうと思います。

この10年の障害者福祉を振り返ってみますと，措置から支援費，自立支援法，総合支援法というふうに，どんどん変わってきました。これはただ単に制度の名称だとか手続だけが変わったのではなく，大きな変化をここに読み取らなければいけないと思います。

それはまず一つは予算が非常に増えてきたということです。障害者自立支援法は悪法だなんて違憲訴訟まで起こされましたけれども，これはとんでもないことで，実はこの自立支援法によって地域福祉が義務的経費となったおかげで，予算が毎年10%前後ずつ増えてきているんです。私は地方によく行きますけれども，これまで全く福祉資源が無かったような地域に，あっという間にいろんな事業所ができて，そこが地元の雇用の場につながったり，あるいは伝統産業をそこで引き継いでやっていったり，いろんな面白い状況が起きているんです。それと共に利用者が非常に増えている。利用者が増えているから予算も増えるということもあるんですけれども，事業者，新規の事業者が非常に増えている。これまで障害者福祉とあまり縁のなかったような分野から転業が，今あっちこっちで起きておりますし，従来の株式会社等も障害者福祉の分野に参入してきております。

これまで医療的ケアが必要だったり高度障害があったりしてなかなか地域で暮らすことができず，施設や病院の中にいるしかないと思われていた人たちが，今では地域の中で暮らせるようになるという非常に素晴らしい状況になってきています。だからこそ福祉に素人のような事業者と，支援の難しい利用者がいるものですから，虐待リスクが高まっているとよく言われますが，確かにそういう傾向は無いとは言いませんけれども，私はそれをそんなに心配してはいないのです。特に株式会社は，サービスの中身に善し悪し色々あって問題もありますけれども，彼らは非常に合理的に考えますので，障害者虐待防止法や差別解消法があるなかで障害者の権利を損なうようなことをしたら自分たちの仕事が一体どうなるのかということをよく分かっており，意外にこのへんは割り切ってそういう危ないことはやらないのです。むしろ心配なのは古いベテランの職員の人たちです。それは何かと言うと，この制度の転換によって，もう一つ重要な大きな転換があり，それは障害者像が変わったっていうことなんです。これまで措置時代には家族や施設の中で守られてきた人たち，これを契約時代になって，社会の中で権利を持った一人の人格として見ていこうじゃないかということなったのです。古くから障害者福祉の中でやってきたベテランの人たちの中には，この意識が切り替わっていない人たちが，割といます。昔の措置時代，親が面倒見られないから，自分たちが面倒を見てやっているんだと，何もできない駄目な人たちを自分たちが世話してやっているんだというような意識です。暴れるような人たちを力で抑えてきた。そういう力で抑えられる職員

が，施設の中で影響力を持ってきた。その過去の成功体験を捨て去ることができない。そういう人たちが今でも，隠然とした影響力を施設内，事業所内で保持している。こういう所はリスクが非常に高いと思います。千葉県社会福祉事業団なんかは典型です。他にも色々リスクが高い所はありますけれども，意外に新規参入の不慣れな人たちよりも，本来であれば障害者に非常に慣れてきたベテランの人たちの方がむしろ厄介なリスクを抱えている場合があるということを指摘しなきゃいけないんじゃないかなというふうに思います。

◇　◇　◇　◇

もう一つ，障害者の権利擁護を進めてきたのは世界的な潮流です。2006 年に国連で障害者権利条約が採択されました。この十数年前の 1990 年にアメリカが ADA，障害者差別禁止法というのを作りましたが，これが各国に波及していったんです。2000 年の時点で，日本弁護士連合会が世界でどのぐらい差別禁止法を持っている国があるのかを調べたら，四十数か国ということでした。数に関して当時の内閣府はまた少し違う見解だったのですけれども，いくつもの国が差別禁止法を持っていた。逆に持っていなかったのが，主要な国ではフランス，韓国，日本だったんです。国連が勧告を出したこともあり，フランスと韓国はそれから間もなくして障害者の差別を無くす法律を作りました。でも日本だけはずっと遅れていたんです。2006 年に千葉県が，自治体ですけれども差別を無くす条例というのを作った。それが各地に波及していったということがあります。そして昨年，障害者差別解消法というのが日本でもできました。そして日本は 140 番目の国連の障害者権利条約の批准国になりました。

ただ，当然，障害者はこういう法律だとか制度だけで生きているわけではありません。むしろ，何て言いますか，障害者が世の中の町で生きている時に示される周囲の理解，あるいは空気，こういうものが彼らの生活というものを左右する大きな要因だというふうに私は思います。この最近日本は，障害者就労，一般企業への就労は非常に良くなってきているんです。よく都心で生活したり仕事をしたりしていても，地下鉄の中で彼らに出会ったり，オフィスの中で出会ったり，見かけたりする機会が非常に増えてきました。やっぱり当事者が街に出て，いろんな人と触れ合う。これが一番大きなことだと思います。これが世の中の意識を変えていく決め手だと思います。

そしてもう一つは，テレビとか映画とかに，障害のある人たちが登場する機会が非常に増えてきたということも一つの大きな貢献をしているんじゃないのかと思います。1980 年代以降，アメリカのハリウッドが作ってきた，障害者，特に知的な障害や発達障害のある人たちを主人公にした映画の例を挙げます。

どれも名画です。「レインマン」では，ダスティン・ホフマンが自閉症の役をやりました。これは素晴らしい映画でした。弟役はトム・クルーズです。いくつものアカデミー賞を取りました。トム・ハンクスが発達障害の役を演じた「フォレスト・ガンプ」という映画もいくつもアカデミー賞を取りました。スターバックスで働く知的障害の男性をモデルにした「アイ・アム・サム」では，ショーン・ペンという名優が知的障害の役をやりました。子役だったダコタ・ヘニングが障害の無い娘さんの役で出演しています。地味な映画ですが，私が一番気に入っているのは「ギルバート・グレイプ」です。主演は今を時めくジョニー・デップで，自閉症の弟を持つお兄ちゃんのドラマなんです。ほのぼのした非常にいい映画です。弟役は本物の自閉症の男の子が演じていると思っていたくらいの演技でしたが，そうではありませんでした。子役時代のレオナルド・ディカプリオです。ディカプリオとジョニー・デップが共演している多分唯一の映画だと思います。

日本では「裸の大将放浪記」が定番ですけれども，実在した山下清さんという，知的障害のある天才画家をモデルにしたドラマです。「天使が消えた街」では藤井フミヤさんが自閉症の役を演じました。「聖者の行進」は，先ほど御紹介した水戸のアカス事件をモデルに TBS がドラマ化したものです。「未成年」では，SMAP の香取慎吾君が知的障害者の役をやりました。ともさかりえさんや草彅剛君も自閉症の役を演じたことがありましね。

「だいすき!!」というドラマをご存じでしょうか。原作はとても人気のあった漫画なんですけども，これをドラマ化したんです。4 年ぐらい前に放送されて，実はこれ，前評判は余り良くありませんでした。知的な障害のある女の子が赤ちゃんを産んで，お母さんたちに守られながら育てていくというストーリーなんですが，そんなホンワカしたホームドラマ，一体誰が今見るのか，なんて随分酷評されたんです。スポーツ新聞でそんな記事を見た記憶があります。ところが公開されたら視聴者には非常に評判が良かった。どうしてなのか，色々説があるんですけれども，一つ言えるのはシナリオです。台本が非常にしっかりしたいい台本だった，これは言えると思います。なぜかと言うと，この私がシナリオの監修をやっていたからということがございます（笑)。間違った表現とか差別的な表現が出ると，批判されて打ち切りになりかねないものですから気を遣うわけですよね。それでチェックを頼まれましたので,「ああ, いいですよ」とボランティアで引き受けました。

ところがシナリオの監修だけではなくて，プロデューサーから「野沢さん，出演してみないか」というオファーが来たんです。何役かって聞いたら，香里奈さんが演じる主人公のお父さん役でどうかということです。これは喜びますね。お母さん役は岸本加代子さんで，岸本加代子さんと夫婦役をやるなんて 2

度とないチャンスだと思って，私は身の程も顧みず「是非お願いします」って２つ返事で承諾したんです。

ところがシナリオがどんどん送られてきてチェックしていくんですが，お父さんがなかなか登場して来ないんです。原作では非常にいい役なんですが。「これはおかしいじゃないか」ってプロデューサーに聞いてみたら「いや，実はテレビではお父さん亡くなってるっていう設定です」って言うんですよ（笑)。冗談だったわけです。私は鵜呑みにしちゃって，ちょっと恥ずかしかったです。冗談なら冗談って早く教えてくれればいいのにって思っていたらしばらくしてプロデューサーから電話があり，「野沢さんお待たせしました。来週の金曜日にロケをやるので来てください。夜までかかるかもしれないから会社に届けを出しておいてもらった方がいい」と言うわけです。亡くなっている設定なのに，これは回想シーンだろう，ついに来たか，と思って緊張感が高まってきて，「服装はどんな格好で行ったらいいでしょうか」と聞いたら「普段会社に来るような格好でいいですよ」と。「そちらで何か用意してくれるんですね」って言ったら，「いや，別にそういうわけでもないんだけど」ってぶつぶつ言っているんです。妙だなと思ってよく聞いてみると，仏壇に飾る遺影の顔写真だけなので服装なんかどうでもいいっていうわけです（笑)。そういうことかと思ったんですけど，まあこれも記念になるかなと思って楽しみにしていたんですが，家族から「あんたの顔が遺影になって全国に流されたら我々はどんな顔して街を歩いたらいいんだ」と猛反対されまして，下の弟からは「学校でいじめられたらどうしてくれるんだ」と言われ泣く泣くお断りしました。

とはいえ番組が終わる時には打ち上げに呼んでいただいて出演者の皆さんと一緒にお酒飲んだりしてとても楽しかったのですが，第１回放送があった直後は，スタッフは一体視聴率はどのぐらい出るのかと大変心配していました。放送前に番組はホームページを作っていて，そこに見た人がどんどんどんどんアクセスし始めたんです。掲示板に「柚ちゃん（主人公の名前）頑張れ」といった書き込みがありました。「うちにも障害がある娘がいまして」とお母さんが書き込んだり「私も障害者なんです」と本人が書き込んだりしていました。それがどんどん殺到し始めた。テレビ局が１日たってどのぐらいアクセスがあったのか調べてみたところ，たった１日で 150 万件だったそうです。これはちょっとびっくりしました。間違いじゃないかと思ってもう１度確認してもらったんですが間違いありませんでした。やっぱりテレビとかネットの波及力って，すさまじいものがあるんですね。

でも最初は 150 万っていう数字はおかしくないかなと考えたんですが，よくよく考えてみるとそんなに突拍子もない数ではないなと思い始めました。

例えば私の家族は私と家内と障害のある長男と障害のない弟の 4 人です。そ

して私の両親と妹夫婦がいます。その子どもが 2 人います。また家内の両親がいて弟夫婦がいます。そうしますと，うちの障害のある長男の背景には，10 人ぐらい，極めて近しい肉親の大応援団がいるんです。日本で知的障害の手帳を持っている人は約 62 万人と言われています。単純計算して 62 万人が 10 人ずつ応援団を持っているとすると 620 万人です。150 万件ってそんなにおかしな数字じゃないなと思いました。だってこれは極めて近しい肉親だけですから。親戚のおじさん，おばさんだとか小中高で出会った先生方や，その家族や親戚や友だち，あるいは福祉事業を利用した時のスタッフやボランティアさんの家族や親戚や友だちなどと加えて行けば，これは膨大な数になります。1,000 万，2,000 万，3,000 万人ぐらいの応援団がいたっておかしくありません。しかもこれは手帳を持っている人をベースにし数字で，手帳を持っていない人を含めたらもっと多いですよね。あるいは身体障害，精神障害を加えればもっと多いです。そうなってくると，むしろ日本で障害の事に全く関係のない生き方をしている人の方が，少ないぐらいじゃないのかなぐらいに思います。

しかも最近は，発達障害という障害が非常に注目されるようになってきています。

◇　◇　◇　◇

発達障害者が一体どのぐらい数いるのかというと，なかなかきちんとした統計が無いんですけれども，10 年ほど前の文部科学省の調査によると，教室の中で発達障害が疑われる児童生徒は 6.3%もいるという結果でびっくりしました。だって 6%って言ったら，東京ドームにぎっしりお客さんが満員になると 5 万人ぐらいですが，その 6%は 3,000 人です。満員の東京ドームの中にこういう人たちが 3,000 人ぐらいいるっていう，そのぐらいボリューム感です。

かつて自閉症というのは 1,000 人に 1 人の出現率なんて言われましたけど，今は 100 人に 1 人なんて言われています。さらに，アメリカのオーティズム・スピークスという団体が各国で疫学調査の支援を行っているんですが，2 年ほど前，韓国が綿密な疫学調査をして発表したところ 37 人に 1 人という結果が出ました。日本のいろんな研究者や特別支援学校の先生方と話しても「日本でも大体そのぐらいじゃないのか」と言う人がいます。今，発達障害の人たちがどんどん特別支援学校にあふれてきて，どこも教室が足りないような状況なんです。

これはいろんな理由があるといわれています。一つは社会的な要因で，関心が高まってきたことで受診する率が高まり，診断技術も発達してきたということです。でもオーティズム・スピークスは，社会的な要因で 6 割ぐらいは説明できるけれども，どうもそれだけではなく，純粋に医学的，生理学的な理由で

増えているものが 4 割ぐらいあるのではないかと言っています。例えば高齢出産が関係しているのではないかと言われております。でもそれだけではないのではないか，何らかの添加物とか，そういうものが影響しているんじゃないかという説もあります。それと今のネットです。ネットがかなり発達障害の人たちと響きやすいっていうことが言われています。従来のような，ネットが無いような社会では，発達障害の要素があってもそれなりに社会に適応してやれていたのが，ネットのカルチャーが，どうもやっぱり発達障害の方たちと響いてしまう。ずーっとのめり込んでしまったりして，そういうことがあって顕在化してくるのではないかということも言われたりしており，まだよく分かっていないんですが，とにかく現在こういう人たちが非常に多いということは間違いないと思います。

特に最近問題になっているのが，大学生です。乳幼児期のいろんな検診だとか，放課後のサービスだとかというのは非常に整ってきましたけれども，高機能で知的な遅れの伴わない発達障害の方というのは，小中高ではいじめにあったりするケースはありますが，ある程度勉強ができるとスーッとそのまま行けるんです。でも大学は勉強ができるだけでは通用しません。カリキュラムを自分で組み立てたり，あるいは教官と交渉したりしなきゃいけない。そういう時に崩れちゃうんです。

そういう学生を支援している一番いい実績があるのは国立富山大学なんですが，発達障害のある学生の支援センターを作っていて，かなり綿密にサポートしたりしています。彼らの不適合が一番決定的になるのが就職の場面です。特にアスペルガーの方なんていうのはなかなか空気が読めない，あるいは言葉の含んだ意味が分からないということがあります。比喩が分からない。「猫の手を借りたいようだ」と言われて本当に猫を探しに行ったという自閉の女の子がおりますし，空気が読めないと言われて，本当に空気のどこに何が書いてあるのか分からないことを悩んでいたアスペルガーの女の子もいます。就職の時の面接で「あなたの長所を言ってください」って言われると「それを言うことによって，私にどういうメリットがあるのか，まずそれから説明してください」などと言ったりします。こんな人なかなか採ってもらえないですよね。「今日はいい天気だね」と言われると「その無意味な質問にはどうお答えしたらいいんでしょうか」などということを言っちゃうわけです。普通ならば，そう思ったって，そんなことを言ったら相手からどう思われるか，我々は分かるから言わないんです。ところが，彼らはそうした配慮が働かなくて言っちゃうんです。

イギリスへ行った時，ある研究者に言われました。麻薬の密売の手先になっていたアスペルガーの人が逮捕されて裁判にかかったそうです。裁判官が「君は自分がやっていることがいかに悪いか理解できないのか」って聞いたそうで

すが，「なぜ，私は悪いんですか。私はきちんとした量の麻薬を測って，きちんとした値段で売ってます」と，滔々と述べたといいます。こういう，独特のコミュニケーションとか認知の偏りのある人たちなんです。この人たちの中には，かなり知的な能力が高い人たちもいます。

この前も JR 西日本の特例子会社に行ったら，京都大学の大学院を卒業した理系男子が障害者として働いておりました。大企業が，特例子会社を立ち上げた時に相談に来たことがあります。「障害者として採用した人の中に，公認会計士の資格を持ている人がいた」って言うんです。私は「いや，そのぐらい別に当たり前ですよ」と言いました。大阪で聞いた話ですが，歯科医師の資格を持っている人が障害者として福祉作業所で封筒に印刷物を入れるだけの仕事をしている人がいるということです。

どうやって彼らのこの社会的な不適合を補いながら，彼らの能力を社会に生かしていくかっていうのは，これからの大きな我々の課題であり，また実はこの辺りにチャンスがあるんじゃないかとも思っています。

というのは，歴史上この手の発達障害のある人で，人類を進化させてきた人が何人もいます。例えばエジソンがそうですね。彼は発明の天才ですが，1＋1が 2 っていうのはどうしても分からないというので教育者を困らせたといいます。夢中になっちゃうと自分の奥さんの事も忘れて「君は一体誰だったっけ」って本当に聞いてしまったっていう人です。あるいは 9 歳の時に，ピタゴラスの定義を理解できたっていうアインシュタインはもう学校では大変な問題児でロクに学校に通っていないっていうことです。素敵な音楽をいくつも残したエリック・サティという作曲家も問題ばかり起こしていました。去年の秋にフランスに行った時に，精神科病院を訪ねたところ，エリック・サティ直筆の手紙が残っていて展示されていました。「何が書いてあるんですか」って聞いたら，元恋人に対する罵詈（ばり）雑言が並べてあるそうです。調べてみると，この当時サティは数か月の間に数百通という手紙をその女性に送りつけているんです。今日本でこれをやったらストーカー規制法に抵触しそうな感じですけれども，こういう無茶苦茶な問題行為をしているけども，でもあれだけの音楽を残している人なんです。他にもいっぱいいます。例えばトム・クルーズ，先ほどの「レインマン」で弟役をやった彼ですけれども，彼はれっきとした発達障害者です。彼の障害はディスレクシアといって学習障害の一種ですが，文字が読めない，読みにくいという障害です。日本でもいっぱいいますが，英語圏では 10%から 20%ぐらいこういう人たちがいると言われていてかなり一般的な障害です。カミングアウトしている人の中には，キラー・ナイトレイとかオーランド・ブルームっていう有名な若手の俳優さんなんかもいるんです。2 年ほど前，超大物が「実は私もディスレクシアなんだ」って公表しました。スティーブン・

スピルバーグです。彼は中学校の時に，文字が読めないものですから，勉強できなくて２年落第したそうです。ひどいいじめも受けたといいます。映画への情熱と家族の愛情に支えられて，今の私があるというふうに，彼はインタビューに答えておりました。

今我々は，情報処理のスピードや記憶力などを非常に重視した学習の中で生活しておりますけれども，それだけじゃなくて，創造性だとか企画力だとかといった才能に着目すると，彼らの中には非常に大きな才能を発揮する人たちがいるんだろうというふうに思うんです。

発達障害というのは，非常に連続性があるものですから，私たちの中にも多かれ少なかれそういう要素はあるんです。それが濃いか薄いかによって，暮らしにくい思いをするか，それとも非常に才能を発揮できるかが分かれる。彼らが置かれている環境を考え，そして彼らをポジティブに見て，支えていってあげられるのかを考えることによって，巡り巡って世の中にこういういろんな貢献をしてくれるということにつながるということも言えるだろうというふうに思います。

◇　◇　◇　◇

とはいえやはり，こういう非常に見た目では分かりにくい障害によって，彼らは，この社会の中で生きていく上で，いろんなトラブルや被害に遭ったりすることがあるんです。それを支えながら，彼らの生きやすい環境を作りながら，どういうふうに社会を作っていくか。

昨年成立した障害者差別解消法というのは，これをやる法律だと私は思っています。この法律の中に，「合理的配慮義務」というのがあるんです。「差別的取扱い」と「合理的配慮義務」，これが２本柱なんですけれども，「差別的取扱い」というのは，これまでの差別の概念です。障害を理由にレストランに入れない，バスに乗せない，あるいは就職試験を受けさせない，不利な扱いをすることです。従来と同様の障害者差別です。「合理的な配慮」で扱う概念はそうじゃないんです。一見公平に扱っているけれども，障害特性に配慮した配慮が無い，そういうことが無いために一見公平だけれども，障害者は実質的な不利な状況に据え置かれてしまっているということなんです。

例えばある会社で，車いすの方も公平に採用したとします。ところが配属された事業所で段差だらけで動けない。あるいは車いす用のトイレがない。そうすると彼は他の人と分け隔てなく公平に扱われていますけれども，長時間事業所内で仕事をするということは難しいです。こういう場合には，やっぱりその障害特性に配慮したことをやってくださいということです。

あるいは知的な障害のある人たちの場合はコミュニケーションだとか認知の所での合理的配慮が必要です。以前は成年後見が付くと選挙権が無くなるということがあり，それについて違憲訴訟が起こされ，昨年それが解決しました。総務省は公選法を改正し，後見人が付いても選挙はできるようになりました。しかし，彼らにとって今の投票所，あるいは選挙が，果たして本当にアクセスしやすいものかというと，意外にそうでもないです。私は非常に言葉が達者で働いている知的障害者を何人も知っていますけれども，彼らの中に漢字を書けないとか，字を書けないっていう人が何人もいます。彼らは非常に政治的なニーズを持っている人たちです。公的な政策へのニーズが非常に強い人たちが，でも字を書けない，漢字が書けないために，選挙ができなくなってしまう。例えばマークシートみたいなのを塗り潰すようにするとか，あるいは名前の上に顔写真を載せておいてもらうとかすると，多くの方がアクセスしやすくなってくるんじゃないかなというふうに思います。

合理的配慮というのは非常に個別性の高いもので，どのような配慮が必要なのかは，それぞれの障害者によって違います。それを配慮することによって一般の人も暮らしやすくなれるということが重要な事なんですが，そうじゃない場合もある。ちょっとやはり一般の人に我慢をしてもらう，あるいは負担を掛ける場合がある。でも，それによってこれまで我々が排除してきた障害者を社会の中に取り込むことができる。このことを，どのぐらい世の中が理解していただけるんだろうかっていうところに，「合理的配慮」が，あるいは差別解消法が世の中に広まっていくのかどうなのかの分かれ道になるんじゃないかと思っています。施行までのあと３年弱に色々研究し，世の中の多くの人に受け入れていただけるような制度に仕立てていかなければいけません。私も内閣府の政策委員会でこの事についての地域協議会のための検討会の座長をやっていますので，ここが一番腐心している所です。

◇　◇　◇　◇

地域に目を向けると，私が経験しているだけでも色々な事件がこれまでありました。警察を担当していた時期，子どもが営利目的の誘拐をされた事件が２年続けて起きました。大きな報道でしたが，報道されなかった重要な要素として，被害に遭った 2 人の子どもにいずれも知的な障害があったということがあります。プライバシーを暴露するのは良くないということで，報道機関は自粛してこれには触れませんでした。でも逆に，こういう SOS を言えない人たちが地域にいっぱいいて，彼らが実際に被害に遭っているという事実を世の中に伝えられないというジレンマにも我々は陥るわけです。

10 年ぐらい前ですが，ある中学生が不良グループに恐喝されて，5,000 万以上取られてしまうという事件がありました。ワイドショーでも取り上げられました。恐喝したグループはそのお金でタクシーを乗り回したり風俗へ行ったりゲームセンターに行ったり，友だちを集めて札束をばらまいたりして遊んでいたというひどい事件です。実はその被害者の中学生にも軽い知的障害があったんです。これは報道されませんでした。お父さんは亡くなっていて，その保険金が入ったのを狙われたのです。お母さんも子どもの言いなりになって，お金を渡し続けるのは一体どうなっているのか，とワイドショーで報道されたりしました。

でももう一つ報道されなかった重要な事実として，そのお母さんにはこの息子よりももう少し重い知的な障害があったということがあります。母子家庭で親子揃って障害があった。そこに付け込まれて食い物にされてしまった。気が付いた時には 5,000 万円取られてしまっていた。学校の先生に相談に行ったり，警察に相談に行ったりしたんですけど，しどろもどろで何を言っているかよく分からないということで相手にされませんでした。しまいには渡すお金も無くなって，夜中に不良グループに公園に呼び出されて殴る蹴るの暴行を受けて大けがをして病院に入院してしまいました。本当にいたたまれないような事件でした。

これから日本はノーマライゼーションを進めていこう，閉鎖的な入所施設や病院よりも，むしろ地域で暮らしていこうじゃないかと，我々は言ってきました。でもその地域が，こんなに殺伐とした，危険な地域であるとすれば，自分の身を守る力の弱い人たちは，一体どうやって安心して暮らしていけるんだろう，そんなふうに私は悩みました。

でもこの事件は，その後の我々に大きなヒントを与えてくれたんです。それは何かと言うと，彼を救ってくれた人が最後に登場したんです。彼が病院に入った時に同じ病室にいたある青年です。この青年は彼の被害に気が付いて，それを警察につないでくれたんです。実はこの青年の素性についても，どこのマスコミも発表していませんけれども，彼は地元の暴力団の組長の息子だったんです。暴力団は一番障害者を食い物にしている存在ですから絶対に信用しちゃいけないんですけど，この組長の息子だけは例外中の例外で，地元の刑事さんに相談に行ったそうです。病室で被害者に聞き取り調査をして，何月何日どこで誰に何と何をされていくら取られたのかというのを，表にしていったんです。当時，地元の中日新聞の 1 面にその表が載りましたが，それを警察に持ち込んだ。警察は一斉に捜査態勢を敷いて，一網打尽で不良グループを検挙しました。この青年がもう一つ偉かったのは，不良グループの名前と住所を全部割り出して，一軒一軒訪ねて親を説教したそうなんです。「お前の家のバカ息子が何をや

ったのか分かってるのか」って怒鳴り上げた。親たちは説教されているんじゃなくて脅されていると思ったんでしょう。一斉に警察に相談に駆け込んで，そこで被災救済，被害弁済の示談が成立しました。

これは非常に私たちにとっては衝撃でした。なぜ衝撃だったのか。水戸の事件や白河育成園の事件のたびに，我々は「警察は一体何をやっているんだ」「法務局はどうなっているんだ」「行政は一体どうなっているんだ」と，そういう批判はしました。しかし誰一人，この青年がやったような役割を，私たちはやっていなかったんです。自分で身を守る力の弱い人たちが，今ではこれだけ地域で暮らすようになった，それを一番よく知っているのは我々です。しかも彼らは自分で守る力が弱いから被害にも遭いやすい，それを知っているのも我々です。実際に彼らが被害に遭った時に，コミュニケーションを補うべきなのは，我々ですよね。にもかかわらず誰一人としてこういう役割をしようとせずに，行政や司法機関を批判しているばっかりだったんですね。

これはまずかったんじゃないか，ということで，その頃こういう問題に熱心だった弁護士の先生たちと，アメリカのイリノイ州に研修に行ったんです。イリノイ州というのは，アメリカの中でもそんなに進んでいる方じゃなくて，やはり大規模施設から地域に戻ってきた障害者が被害に遭っていました。でもイリノイ州立大学に，それに気が付いて，これは何とか安全な地域を作っていこうっていう先生がいたんです。ナンシー・フィッツシモンズ-コバさんという方です。彼女が作った地域の勉強会に地元の警察署の担当刑事さんが参加して取組が広がっていったんです。私たちはマリリン・ジョンソンという刑事さんにレクチャーを受けました。これは素晴らしいレクチャーでした。翌年日本で研究班を作り，厚労省に協力していただいて，ナンシー教授を日本に呼んであちこちで講演してもらいました。マリリン刑事にも休暇を取ってもらって日本全国で講演してもらいました。警察庁にも協力していただいきました。やっぱり何言っても，トラブルになったり被害に遭ったりした時に真っ先に駆けつけてくれる警察に，知的障害や発達障害の人たちの事を理解していただかなければいけないんじゃないかということで，警察官向けのマニュアルを作り，警察庁に持って行きました。「こういうものを我々は作りました」「アメリカではこんな取組をしています。日本でも一緒にやりましょう」と持ちかけました。喜んではくれたんですが，忙しいということでなかなか乗ってきてはくれませんでした。

警察庁に 2 度 3 度と行ってもなかなかうまく行かないので，我々のネットワークの強い北海道，東京，大阪の 3 つをモデル地区にして，北海道警，警視庁，大阪府警に掛け合って，そこで色々な勉強会とかやらせていただくようになりました。でもやっぱりどうしてもある所まで行くと壁が破れない。これはやは

り警察庁にお願いして声掛けてしてもらうしかないということで，最後のチャンスだと思って，もう一度警察庁に行きました。「また来たのか」みたいな顔もされましたが，今回だけは我々も簡単に引き下がれない。「どうして分かってくれないんですか」「アメリカじゃこんなに警察がやっています」「日本だって障害者がこんな目に遭っていますよ」と結構強く言いました。そうしたら，難しい顔をしてじっとつらそうに目をつぶっていた幹部の 1 人が急に眼を見開いて，「分かった, やろうじゃないか」って力強く言ってくれたんです。「そうですか。では東京，大阪，札幌での勉強会を続けるために声を掛けてください」って言ったら，「もちろんそれはやる。ところであなたたちが作ってくれたこの警察官向けのハンドブックはとてもいい内容なので全国の警察に配りたい。ちょっと分けてくれ」って言うんですね。「ああいいですよ。何部ぐらい用意しましょうか」って言ったら「うーん」って考えて，「全部で 2 万 6,000 部くれ」って言うんですね。「2 万 6,000 部もどこに配るのか」と言ったら，47 都道府県本部の全部署が約 1,300，交番が 6,500，駐在所が 9,000，全部で 2 万 6,000 部ぐらいになると言うんです。我々の研究費はもう全部なくなっちゃったわけですけれども，では配ってもらおうと印刷しました。地域で障害者が安心して暮らせるようなネットワークを作ろう，いざという時のために動けるような，そういう環境を作ろうということで号令を掛けてやってくれました。

これを NHK の「おはよう日本」が取り上げてくれて，それを見た埼玉県警から捜査の協力依頼が来ました。13 年前に，知的障害のある御夫婦が生命保険を掛けられて放火されるという事件がありました。奥さんは亡くなり，だんなさんは大けがをしましたが怖くなって口をつぐんでしまい，捜査ができなくて放置されていたという事件です。我々が捜査協力して，専門家の意見書を持って行ったり，だんなさんを一時避難させるようなシェルターを用意したりして 13 年ぶりに解決しました。実行犯と主犯はいずれも無期懲役の刑が確定しました。

今でも千葉県警の警察学校で，毎年，新任の警察官研修で，知的な障害のある子どものお母さんが説明をしたりしています。見た目からは，障害は分からないかもしれない，薬物中毒と間違えられちゃったりするわけですけれどもそうじゃないんだということを説明しています。精神障害の方で妄想がある方もいらっしゃるわけですが，そうした方々の正確な特性，あるいは彼らはどういう暮らしをしているのか，どんな被害に遭っているのかっていうようなことを聞いていただいたりもしています。新任のうちの研修で一度でもこういう話を聞いたことがあるといざという時に何か役に立つかもしれません。毎年，毎年やっていけば 10 年たったら 5,000 人，6,000 人の警察官が一度はこういう話を聞いたことになるから辛抱強くやりましょう，と教官の先生は言ってくれています。

◇　　◇　　◇　　◇

さて，先ほどの話の中で，どうして下を向いたきりだった警察庁の幹部の方が急にやる気になってくれたのかっていう話を，是非したいと思います。その方は三重県警から出向してきた方で，地元に帰る時，新橋の安い居酒屋で送別会を開いたんです。「あなたのおかげでこんなことができるようになりました。ところでどうしてそんなにやる気になってくれたんですか」と私は軽い調子で聞いたんです。その時初めて話してくれたんですが，彼には兄と妹がいるんですが，どちらも重度の脳性麻痺で，生まれてからずっと寝たきりだったと言うんです。田舎の方だし，当時は養護学校も義務制でなかったものですから学校にも通っていない。天気のいい日はお母さんが縁側に布団を並べて敷いてお兄ちゃんと妹をひなたぼっこさせていた。そうすると，近所の子どもたちが面白がって覗きに来る。脳性麻痺の方の，なかなか動けない，ぐたっとしたような様子を見て笑うのだそうです。「お前の家には骨のない人間がおるのか」「お前の兄ちゃんは骨なし人間か，骨なし，骨なし」とはやし立てられたんです。それがとても辛くて，彼の中に傷として残っているというわけです。私は「ああそうだったんですか。そんなことも知らずに，随分傷付けるようなことを言ってしまったんじゃないか」って謝りました。よく家族旅行をしたそうです。ずっと家で寝たきりですから，いい景色を見せたい，いい空気を吸わせたいということで，いろんな所に連れて行ったそうです。高校時代にも，ある景勝地に家族で行って，車を止めて，御両親が大きくなったお兄ちゃんと妹をそれぞれ背負ってよたよたしながら車から降りて景色を見せてあげていた。それを他の観光客がやっぱりちらちら見るそうなんです。高校生になった彼はその視線に足がすくんでしまって，車から降りられなかった。降りられないどころか車の中で小さくなって身を隠していた。ガラス窓越しに，よたよたしながら遠ざかっていくお父さんとお母さんの背中，背負われているお兄さんと妹の背中をじっと見つめることしかできなかったって言うんです。それが彼の中にとげになって残っている。同じ兄弟なのに，同じ家族なのに，どうして一緒に歩くことすら自分にはできないんだ。どうしていつまででも，老いたお父さんやお母さんにばっかり背負わせているんだ。自分で自分を責めるわけです。

でもそれをバネにして，高校を卒業した後に警察官になって，真面目一徹で勤め上げた。その勤務ぶりが認められて，警察庁への出向を命じられた。多分彼の人生の中で一番輝かしい時だったんじゃないかと思います。その時に見ず知らずの我々が訪ねてきて，「日本じゃ障害者はこんなひどい目に遭っているじゃないか。何で日本の警察は障害者の事について無関心なんだ。アメリカじゃ

こんなにいい警察がいるじゃないか」などと言うわけです。今思うと，彼はいつも辛そうな顔をして下を向いていました。

「辛かった。あんたたちに責められているような気がした」と彼は言いました。「それを一番よく分かっているのはこの俺だ。俺がやらなきゃいけない」と思ったそうです。「警察官になって 20 年，30 年過ぎようとしているのに一体自分は何をやっているんだ。あなたたちにそういうふうに言われているような気がした」と言う彼に「本当にすみませんでした」と謝ると，「いや，そうじゃない。謝らないでくれ。ここで引き受けられなかったら一生後悔するところだった。ありがとう」と言ってぼろぼろと泣きました。「お兄ちゃんと妹さんはどうされているんですか」と聞いたら，やはり体の機能が弱いものですから，40 ぐらいで相次いで亡くなってしまったそうです。ずっと家族の中だけで暮らしていたので来てくれる人も少なく，寂しいお葬式でした。火葬場でお兄ちゃんが煙になっていくのを見て涙が止まらなかったそうです。そして，生まれてから一度も自分と言葉を交わしたことの無い兄だったけれども，自分を守ってくれたのは兄だったのではないか。自分にいろんなことを教えてくれたのは兄だったのではないか，そんな思いが込み上げてきて体の震えが止まらなかったそうです。「他の窯からも煙が昇ってきますよね。それを見ていたらみんな同じ形をしていることに気が付いた」。私は「形ですか」と聞き返しました。「煙には形があって，生きてる時には姿形が違うけれども，死んで空に帰っていく時にはみんな同じ形をして帰っていくんだなと思えた。小さい時には，骨なし人間，骨なし人間って，子どもたちにばかにされたお兄ちゃんだったけれども，死んで今空に帰っていく時には隣の人と同じ形をしていた。それがとっても嬉しかった」そう彼は言いました。

私はこういうことをやってきて，一体どのぐらいの人が理解してくれるんだろう，と，砂漠にジョウロで水をやっているような気になったことがあります。でもたった１人でも，こういう宝物のような警察官と巡り合えて本当にやって良かったなと思います。いろんな障害のある子どものお母さんたちにこの話をすると，皆さん本当に喜んでくれます。やっぱり親はみんな悩みを抱えているんです。親亡き後の不安。自分が生きている時には何としてもこの子を守ると思っていますが，でも自分が先に死んでいく。この子をこの社会にどうやって残していくんだ，とみんな不安に思っています。その時にこういう警察官が一人でもいるということが，どれだけそのお母さんたちに希望をもたらすか，ということなんです。

これまでは，障害のある子が生まれると，家族が背負うしかなかった。今はもうそうじゃない，地域でやるということになった。でもその地域に出したって，我々は不安ですから，福祉の柵で囲っちゃうわけです。それが果たして本

当に本人たちにとって自由な地域生活なんだろうか。むしろ福祉の柵の向こう側に，お話ししたような，宝物のような警察官のような，そういう資源が眠っているんじゃないか。障害がある人を治療したり教育したり養育したりして普通の人に近づける努力はとても大事ですけれども，それだけじゃなくて，むしろその柵の向こう側の人に呼び掛けて，こちら側に歩み寄ってもらう，こちらの方がこれからは大事なんじゃないのかなって，そんなふうに思います。

◇　◇　◇　◇

今，障害者の雇用が非常に伸びています。障害者が地域で働くようになってきた。これが制度の展開において一番大きな点で，これまでは授産の対象だった人たちが自ら働いて，納税者になっていこうじゃないかということです。

去年，安倍首相の補佐官の衛藤晟一さんと一緒に，デンマーク，スウェーデン，フランスを回って来ました。デンマーク，スウェーデンは，世界で一番福祉が充実した，世界一幸せな国だって言われていますけれども，行ってみるとこの高い福祉を支えているものは，やっぱり財源で，成長戦略をしっかりやっていて，負担も非常に多いですし，それが無ければああした高福祉は実現できないな，と思いました。

北欧でもユーロ危機の中で，医療や福祉を，ちょっと削減もしながら，質の違うものに変えようとしています。これが意外に，日本に近似性があるということが分かりました。先週もいろんな方とシンポジウムをやったんですが，公的な福祉が非常に進んでいたデンマーク，スウェーデンが今，日本と同じような事をやり始めていると言うんです。私は本当にそうだと思っています。

まず雇用についてですが，オランダが今雇用について革命的な事をやっています。フレキシキュリティなどと言っています。3 年ほど前にオランダの政府に招かれ雇用について視察しましたが，一面では打ちのめされるほど素晴らしいものでした。でも障害者雇用の現場を見たらがっかりでした。スーパーで知的障害者が働く現場を見せられ，「オフィスの中で働かないのか」と聞いたら「知的障害者にオフィスは無理だよ」と言われました。「なんだ」と私は思いましたね。この分野だけは日本の方が突出していいです。どこの国に行っても，知的障害，精神障害，発達障害のある人が，都市部の大企業のオフィスの中でこんなに働いているのは日本ぐらいじゃないかなって，最近思うようになりました。

東京駅界隈の高層ビルの中でも知的障害，発達障害の方々はいっぱいいます。どこの大企業もみんなこういう方たちを雇用するようになってきて，今障害者雇用が非常に伸びているんです。面白いのは，私がやっている NPO が東証 1 部上場 500 社にアンケートを取ったんですが，これまで企業就業に馴染まなかっ

た知的障害の人を積極的に採りたいっていう会社が 3 割，積極的じゃないけど採るよっていう会社も 3 割になっています。さらに面白いことに，もうすでにたくさん知的障害者を雇用している企業ほど，もっともっと雇用したいという意欲が強いという調査結果が出てきたんです。これはなぜかと言うと，最初から無理だと思っている所は進まない。でもいっぺんでも体験していると，いや，意外にやれるねって分かるということなんです。

ある大企業の社長さんは私にこう言いました。「うちみたいな都市部の，エリートばっかりの本社の中で，知的障害者，知的な遅れを伴っている人たちが働くのは無理だと思った。ところが彼らを採用して，やって来て私の顔を見るなりこう言った。『おはようございます。社長さん，今日も頑張って仕事をしてくださいね』と。えっ，頑張らなきゃいけないのは君らの方だろって一瞬思ったんだけど，何か気持ち良かった。考えてみると，グローバリゼーションの中で余分なものを削ぎ落として，削ぎ落として，合理化，効率化を求めてやってきた。でも大事なものまで削ぎ落としてしまうような気がする時がある。彼らは確かに働くスピードは遅い。でも意外に正確だし，何よりもいいのは，一生懸命やる。あいさつをする。働く喜びを身体全身で臆面も無く表す。そうすると他の人達の士気が上がってくる。一人一人の生産性は確かに低いけれども，チームとして見た時に，彼らが入ったチームの方が生産性は上がる」と言うんです。実際，いろんな要因で，知的障害者を雇った企業は業績が伸びているんです。もちろん業績伸びるから雇えるという面もあるんですが，やっぱりうまく彼らが社内で起こすものを取り入れているんです。

地方の方は地方の方でもっと面白いんです。愛媛の愛南町で出会ったお医者さんですが，精神病院に長期入院している人をどんどん町に返しちゃう。それでいろんな産業をやるんです。バブルの頃に町が作った温泉施設を彼の NPO が引き受けてそれを精神障害の方とお年寄りだけで運営し，都会に営業をかけた。そうしたらどんどんお客さんが来ました。また農場で精神障害と高齢者の方がアボカドを生産したりもしています。

九州の福岡にある精神科病院がやっている地域活動支援センターの例です。長期入院していた人が退院するとまずこのセンターに来ます。ちょっと慣れてきたら，近所の一人暮らしのお年寄りの所に，「お手伝い屋さん」っていうチラシを持って行くんです。庭の草むしり，買物の付添い，棚の奥の掃除などの手伝いをする。介護保険ではなかなかこういうのをやってもらえなくなってくるので，それを彼らがボランティアでやるというのです。これは何がいいのかというと，一人暮らしで足腰の弱ったお年寄りが買物に行っても重いものを持って帰れない。そこに黙って障害のある人たちが嫌な顔もせずにずっと時間かけてでも付き添ってくれる。「お兄ちゃんありがとう。あなたがいないと困るわ」

という言葉が，長期入院していた彼らにとって，どれだけ良い言葉かということです。だって「ありがとう」なんて，これまでほとんど言われたことのない人生ですからね。「あなたがいないと困る」どころか，いられたら困るから病院の中にずっと社会的入院をさせられていた人たちです。自分も感謝される人間なんだ，ここにいていい人間なんだ，という自尊心をもう一度感じ取って，地域で暮らす土台を作っていくっていうことです。

さわやか福祉財団の堀田力さんにこの話したら，「いや，野沢さん，それは年寄りも全く一緒だ。どんなに寝たきりでも，認知症でもボランティアをして人の役に立つのは一番いい。寝たきりの人，何できるのかって言ったら，傾聴ボランティア。悩みを持った人が寝たきりのお年寄りの枕元に座りこんで，延々と悩みを話すと，辛抱強く聞いてくれるんだ」と言うんです。

他に認知症の人は何ができるのかというと，子どもたちの安全を守るのは得意だって言うんです。下校中に事件や事故に巻き込まれるということが何件かあり，通学路の安全をどう守るのかが問題になりました。その時にある病院に院長が，それだったらうちのグループホームで暮らしている認知症のおばあちゃんたちに任せろって。通学路を散歩道にする。これは学校の先生と地域の人たちに猛反対されたそうです。「認知症の人にうろうろされたら余計子どもたちが危ない，やめてくれ」と。ところがそのお医者さんは「大丈夫。あなたたちは認知症を知らないからそう言う」と。治安って不思議なもので，高い塀とか作っちゃうと，結構泥棒はそういう所を狙ったりするんです。あけっぴろげで人の気配がする所って悪意が意外に近寄りません。認知症のおばあちゃんたちがいれば人の気配がある。子どもたちの下校時間に合わせて通学路をぞろぞろぞろぞろ歩いたら，もう圧倒的ににぎやかになっちゃったんです。先生たちが「おばあちゃんありがとう，いつも助かるわ」って手を握ったりすると，これはおばあちゃんたちにもすごくいいっていうんですね。唯一困ったのは子どもたちがおばあちゃんたちと話し込んじゃって帰ってこないっていうわけなんですが，これは素晴らしいことじゃないかなと私は思います。

これまでは，我々の日本の社会は，障害者やお年寄りのように経済成長に貢献できない人を分け過ぎてきたのではないのか。今，人口がどんどん減り始めている中で，インクルーシブな社会を作ってむしろ彼らを取り込んでいくべきではないか。その中で，我々が思ってもみなかったような化学反応が起きるのではないか。「おはようございます社長さん，頑張って仕事してくださいね」と言われた時の社長の心に起きた化学反応，あるいは認知症のおばあちゃんの話に目を輝かしている子どもたち，こういうことをやっぱりこれから目指しながら支え合える地域を作っていくっていうことが大事じゃないのかなって思うんです。

障害者だけを守っていくということは，これは不可能だと思います。障害者が暮らしやすいような街を作っていって，もっともっと暮らしにくい人たちが今，いっぱい出てきていますので，そういう人たちも暮らしやすいような，そういう楽しいゆったりとした地域社会を作っていく。これがこれからの成熟した地域社会というものの在り方なのではないか。そうしたことを考えながら，今，いろんな各地の実践を見て回ったりしております。

時間がもう過ぎましたので，この辺で終わりにしたいと思います。どうも御静聴ありがとうございました。